

退任記念講演

禅宗灯史と敦煌遺書

田 中 良 昭

序

只今、仏教学部長であり、仏教会の会長でもある池田龜參先生から、過分のご紹介をいただきました。仏教学部の田中良昭でございます。ご紹介にもありました通り、私は、本年三月末日をもって、四十一年間の本学の教員としての生活、更に私は、本学仏教学部を卒業し、その後本学大学院を経て教員として採用していただきましたので、学部と大学院の九年間を加えますと、まさに五十年間駒澤のキャンパスで過ごしたことになります。今月十五日発行の『学園通信』第二四八号に、「在職中の思い出」として掲載された私の文章にも、「これまでの七十年の人生の内、五十年の長きにわたって本学で過ごしたことになります、私から駒澤を取ってしまつたら後には何も残らない」と書きましたけれども、これはまさに私の現在のいつわらざる実感であります。

左様左程に、私は本学に学び、多くの先生方や教職員の先輩、同僚、後輩、更には私の授業を聴いてくれた数多くの学

生諸君との交流を通じて、実り多い豊かな人生を送らせていただきました。

それら各位のご厚情に対し、まずもって深く感謝の意を表したいと思ひます。

また本日は、それぞれご多忙の中を、私の最終講義のためにご参集下さいましたことに重ねて御礼申し上げます。いよいよ来るべきものが来たという気持であります、しばらくの間お時間をいただきたいと思ひます。

さて、今回のテーマを「禅宗灯史と敦煌遺書」とさせていただきます。この「と」で結ばれた二つの言葉は、私のライフワークである中国禅宗史の研究の究極的なキーワードでありまして、資料の序にも書きましたが、「正伝の仏法」という言葉がありまして、その仏の正法を灯明あかりにたとえ、その灯明を師から弟子へと嫡嫡相承すること、すなわち伝灯こそ禅の眼目であるとするのが禅の禅たるゆえんですから、その立場から、中国禅では、早くから伝灯系譜を主張する歴史書が作成されてきました。これを「禅宗灯史」といいます。一

方の「敦煌遺書」というのは、中国の西辺のオアシス都市敦煌の東南郊外にある鳴沙山莫高窟の第十七窟、ここに龐大な数の經典を中心とした古文書が所蔵されていたことから、これを藏経洞と呼んでいます。この敦煌の藏経洞から出現した古文書を、「敦煌に遺されていた古文書」ということで「敦煌遺書」と呼んでいます。この両者の關係についてお話するのが、今日の講義の意図するところですが、結論を先にいえば、初期の中国禅で成立した「禅宗灯史」は、その大部分が「敦煌遺書」の中から発見されたものであり、もし藏経洞の偶然的発見がなかったなら、中国の初期の禅宗の実態は、ほとんど説明できなかつた、という事です。逆にいえば、「敦煌遺書」の発見によって新たな「禅宗灯史」の存在が知られ、その禅宗灯史の研究によって、中国禅宗史の研究が画期的な進展を果し得たことを声を大にして申し上げ、静かに教壇を去りたいと思つた次第です。

そこで以下、次のような項目を立てて、順次講義を進めていきたいと思ひます。少し専門的な内容になるかと思ひますが、その点はお許し願ひたいと思ひます。

資料のゴチックで表しました部分ですが、以下の四項目です。

- 一、敦煌遺書の発見と流出
- 二、中国禅宗史の研究と敦煌遺書の役割

- 三、敦煌の禅文献 その内容と構成
- 四、敦煌の禅宗灯史 その成立と展開

一、敦煌遺書の発見と流出

敦煌遺書について述べる前に、敦煌について概略お話ししておきたいと思ひます。

敦煌は、中国西北部に位置する甘肅省の、西の端にある砂漠の中のアアシス都市で、古くから中原と西域を結ぶ交通の要衝とされてきました。特に古くから文化の栄えた東の中国と、西のギリシャ・ローマを結ぶ交易路が、中国から輸出された絹に因んで、絹の道シルク・ロードと呼ばれたのですが、敦煌は、このシルク・ロードの中国から西域への出口、逆にいえば、西域から中国への入口に当ります。インドに成立した仏教の内、北方に伝わった北伝仏教の大部分も、このシルク・ロードを経由して、西域から中国へ入つたと思ひますし、インドや西域からの渡來僧も、仏像や經典も、その多くが敦煌での滞留を経て、中原にもたらされたといえます。

このように敦煌は、古來交通の要衝として重要な役割を果していたのですが、それが一躍世界の関心を集めるに至つたのは、極めて偶然的の出来事でありました。資料に書きまされた通り西暦一九〇〇年、当時中国は清という国でしたが、その

光緒二十六年六月二十五日 中国では二十二日とします

に、敦煌の中心から東南約三十キロにある鳴沙山莫高窟 現在番号の付されたものは四九二窟あります を管理していた道士の王円籙が、現在第十六窟とされている窟院の、入口から中へ通ずる通路の右側側壁に、裂け目ができているのを発見し、その裂け目の入った側壁を取り除いていくと、その奥に新たな洞窟 現在の第十七窟で蔵経洞といえます のあること、しかもその中に、膨大な数の古文書類がうずたかく積み上げられているのを発見したのです。これが敦煌遺書出現の経緯です。

この偶然的発見は、当時西域の探検に関心を寄せていた各国の探検家の知るところとなりました。彼等は、次々と敦煌へ来て、発見者の王円籙と交渉し、洞窟内の古文書類を自国へと持ち出したのです。すなわち、最初に来たのが、ハンガリー人で後にイギリスに帰化したオーレル・スタイン Aurel Stein です。一九〇七年五月に来て持ち出したものが、ロンドンの大英博物館に収蔵されました。これがスタイン本で、現在は大英図書館に移されています。次いで翌一九〇八年二月に来たのが、フランスの東洋学者ポール・ペリオ Paul Pelliot です。数こそスタインには及びませんが、秀れた内容の古文書類を持ち出し、パリの国立図書館に収蔵しました。これがペリオ本です。

このスタインとペリオの両外国人による貴重な古文書類の国外流出を知った清朝政府は、急ぎ敦煌に残存する文物の保全を命じ、一九〇九年、それらを北京の京師図書館 現中国国家図書館 に移送し搬入しました。これが北京本です。しかしそれでも尚、敦煌には数多くの古文書類が隠されていたようで、一九一〇年から一二年にかけて、日本の大谷光瑞を隊長とする大谷探検隊が来て持ち出したものが、京都の竜谷大学と、中国東北部の旅順博物館に収蔵されました。これが大谷本です。この内、旅順博物館のものは、その後行方不明となった五点を除いては、すべて中国国家図書館に移されています。更に一九一四年から一五年にかけて、ロシアの仏教学者セルゲイ・オルデンブルク Sergey Oldenburg が来て持ち出したものが、セント・ペテルスブルクにあるロシア科学アカデミー東方研究所に収蔵されました。これがオルデンブルク本です。

このように世界には、五つのコレクションが存在していますが、その他に、台湾の台北の中央国家図書館にある台湾本、中国の上海図書館や敦煌県博物館等、各地の図書館や博物館にあるもの、日本の書道博物館等にあるもの、更には個人が所有するもの（禅籍では石井光雄旧蔵本の神会録・絶観論・歴代法宝記等）等があり、その数は、小さな断片 フラグメントといえます を含めると、およそ五万点といわれています。

そして、これらの世界の各地に分散された敦煌遺書については、各コレクション毎に、整理と修復、分類作業と目録の作成、マイクロフィルム撮影とその交換、影印本や研究成果の出版等が継続的に行われており、目録と影印本を利用すれば、自国に居ながらにしてかなりの部分の文献内容を知ることが可能になりました。ただ写真はあくまでも写真真であつて、実物調査ができれば、それに越したことはありません。私自身既に三十年も前のことですが、一九七二年、本学に新設された在外研究制度の第一号として、七ヶ月にわたりスタイン本とペリオ本の実物調査を行い、大いに認識を改めたことでした。

二、中国禅宗史の研究と敦煌遺書の役割

禅は、インドにその起源を持ち、仏教の開祖とされた釈尊が、菩提樹の下での坐禅の実践によって正覚を成じたことから、仏教の基本的な実践道とされ、後にこの禅の教えを中国に伝えた菩提達摩を祖と仰ぐ人びとが、その教えを継承して中国禅宗を確立し、その教えはチベットに伝えられる一方、韓国や日本に將來されて、それぞれに独自の発展を遂げたといえます。こうした禅の歴史的展開の中で、今問題の敦煌遺書と直接関わるのは、菩提達摩に始まる中国の禅が、後に馬祖道一や石頭希遷の活躍する頃になつて、禅宗として確立し

た、とする定説に従えば、この禅宗の成立する以前の、主として初期の中国禅ということになります。（別紙の中国禅宗系譜でいうと、左側に記載された部分をさす）

従来、この時代の中国禅の歴史を研究しようとするれば、その基本資料とされたのは、資料の伝世資料の内容としてあげました唐の道宣による『続高僧伝』（六四五、六六七まで増補）と、その続篇である北宋の贊寧による『宋高僧伝』（九八八）の、いわゆる高僧伝類でありました。しかしこれ等は、各時代に活躍した高僧の伝記を集録したものであつて、禅宗の歴史を記述したものではありません。個々の禅僧の行実は知り得ても、それで中国禅の歴史を明らかにすることはできません。そこで、禅宗内で成立した歴史書、すなわち禅宗灯史類を求めると、五代南唐の静・筠二禅徳による『祖堂集』（九五二）と、北宋の道原による『景德伝灯録』（一〇〇四）になります。しかしこれらも、正法の伝承である師僧と弟子との悟りの機縁と問答を集録したもので、客観的な禅宗の歴史を記述したものではありません。しかもそれらは、十世紀中葉から十一世紀初頭の成立ですから、初期の中国禅を知るには、いかにも後代の資料といわざるを得ません。

かくしてかねてより、『続高僧伝』の成立の七世紀中期から、『宋高僧伝』の成立の十世紀後期に至る、およそ三四〇年間を埋める禅宗の直接資料の出現が待たれていたのです。

この期待に於いて出現したのが、まさに敦煌の禅文献であったのです。禅の研究、とりわけ初期の中国禅の研究にとって、敦煌の禅文献の最大の意義と価値はこの点にあり、その果し得る役割も、極めて大なるものがあるといえましょう。

三、敦煌の禅文献 その内容と構成

敦煌遺書は、五世紀から十一世紀までの文献を含み、その使用言語も、大部分が漢文文献です。しかもその漢文文献の内、八七・五％が仏教文献といわれています。更に仏教文献でも、その多くが上質の野紙に一行十七字で整然と書写された経典であるのは、写経の功德が説かれたためでしょう。これに対し禅文献は、そのほとんどが紙質もよくなく、一行の字数も不揃いで平均二十三字前後が多く、不要になつた廃紙の裏面に書写されたもの、文献番号に裏を二示すラテン語 *verso* の V を付す もあります。また大部分の経典が卷子本であるのに対し、禅文献には『六祖壇經』のように冊子本もあります。禅文献の点数については、およそ四百点を数え、同一文献の異本も多いので、実際の文献数は、その四分の一乃至五分の一位ではないかと思ひます。ただ最近も中国で、中国国家図書館の地下倉庫から、木箱に入った敦煌文献が見つかり、その中に三種の禅文献のあったことが報告されており、実際の文献数は今なお流動的です。

そこで私は、現存する敦煌の禅文献を、内容の上から次の四種に分類し、この四種でもって全体を構成することにしていきます。

(一) 禅の歴史的展開を述べつつ、自派の達摩正系を主張した、伝灯の歴史書としての灯史類、これが次に問題とする禅宗灯史です。

(二) 禅僧による説法や問答、或いは問答形式による禅法の説示や禅の思想を記録した語録類

(三) 禅僧による悟りの境地や修道の悦び、或いは会下の学人への修行の用心や心構えを、韻文でうたいあげた偈頌類

(四) 禅僧による経典（『般若心經』が数多くある）の注釈や要抄、或いは経典の形式を借りて、自らの思想や禅法を述べた偽経類（作者は当然匿名であり、禅宗系譜には出ない）以上の四種をその内容とします。

四、敦煌の禅宗灯史 その成立と展開

敦煌の禅文献を構成する四種の内、中国禅宗の歴史的展開、すなわち中国禅宗史の研究にとって、最も大きな貢献をしたものは何かといえ、それは最初に挙げた（一）の灯史類を措いて他にない、というのが私の考えです。そこで以下、この点に焦点をしばり、その成立と展開の状況を、（一）北宗

灯史、(二)南宗灯史、(三)浄衆・保唐宗灯史、(四)その後の禅宗灯史の四項目に分けて論述していきたいと思います。

(一)北宗灯史

禅宗灯史の嚆矢とされる北宗灯史として、最初に出現したのが杜拙の『伝法宝紀』(七三三頃)です。この書は、杜拙の序文中に西天の三祖の名を出し、それに続いて、達摩から慧可、僧璨、道信、弘忍、法如を経て、北宗の祖とされる神秀に至る東土の七代の伝灯系譜と、七代の祖師の略伝を記しています。(文献番号は、繁をさけるためすべて省略し、後日「論集」に掲載の際に入れさせていただきます)大正蔵経巻八十五に収載のP二六三四は、杜拙の序と達摩章の首部数行のみで、以下を欠く残巻ですが、後に首尾完全なP三五五九が神田喜一郎氏によりパリで発見されて、その全容が知られるに至りました。その本文校定と注記が、柳田聖山氏の『初期禅宗史書の研究』(京都、法蔵館、一九六七、柳田聖山集 巻六として再刊、二〇〇〇)に収載され、更に解説と本文校定、訳注が、同じ柳田氏の『初期の禅史』(禅の語録 2、東京、筑摩書房、一九七二)に収載されています。

この『伝法宝紀』とほぼ時を同じくして、同じ北宗灯史である浄覚の『楞伽師資記』(七三三 七二六)が出現しました。

この書は、達摩が重視したという四巻『楞伽経』の仏法が、訳者の求那跋陀羅を第一代、達摩から慧可を経て僧璨に至る楞伽宗 胡適氏の『楞伽宗考』によるの三代、道信と弘忍の東山法門の二代を経て、北宗の神秀・玄奘・慧安の三人を第七代、神秀の門人の普寂・敬賢・義福・惠福の四人を第八代とする、前後八代にわたって相承されたことを主張したもので、著者の浄覚は、第七代の玄奘の門人です。古く矢吹慶輝氏発見のS二〇五四と、胡適氏発見のS四二七二とP三四三六の三本を、金九経氏が校訂して、『校刊唐写本楞伽師資記』(京城 現ソウル、一九三二、圓園叢書、瀋陽、一九三五)として出版し、大正蔵経巻八十五は、先の矢吹氏の一本と金氏校訂本を対校しています。しかし上記三本では、浄覚の序文の首部を欠いたままでした。それが後に、浄覚の序文の一部を補うP三二九四を私が発見し、また巻首の標題部分を補うP四五六四を柳田氏が発見しましたが、それでもなお、この間に僅か数行とみられる脱文があつて、今だに完全な復元には至っていません。この書についての詳細な研究は、先の柳田氏の『初期禅宗史書の研究』にあり、また、解説と本文校訂、訳注も、同じく柳田氏の『初期の禅史』に収載されています。尚、この書の一部のチベット訳が、スタイン蒐集チベット文献中に、プサン目録七一〇(2)と七〇四の二本あることも、知られています。

(二) 南宗灯史

北宗灯史の主張する伝灯系譜は、東山法門の弘忍の法が神秀に伝えられた、すなわち、神秀こそ達摩の正系である、というものです。ところが、これに対し、神秀を祖とする一派を、「師承是傍、法門是漸」として批判し、達摩の正系六祖は、頓教を説く曹溪の慧能である、と主張したのが、慧能の弟子の神会です。神会は、開元十八年から二十年（七三〇—七三二）に至る三年にわたり、河南省滑台の大雲寺での無遮大会（系譜にもなし）に法論をいどみ、開元二十年正月十五日の第三回目の法論の記録が出現したのです。これが独孤沛編の『菩提達摩南宗定是非論』、『定是非論』と略称です。このテキストは今年の『禅学研究』で取り上げ、最後の講義をしました。

『定是非論』は、法論の記録であり、灯史類に入れることは問題ですが、この書が主張したことは、達摩が一領の袈裟を伝えて伝法の証とし、その袈裟が、慧可、僧璨、道信、弘忍を経て慧能に正伝されたとする伝衣説によって、慧能こそ達摩の正系とする新たな伝灯説の確立にあったのです。この意味で、私は南宗灯史の代表と位置づけています。

この『定是非論』を初めとして、神会に関する諸文献の研究は、そのほとんどすべてが胡適氏によるものであり、その業績は、柳田氏主編の『胡適禅学案』（京都、中文出版社、一九七五）に採録され、私も、先に発表した「神会研究と敦煌遺書」（『駒澤大学禅研究所年報』二二号、二〇〇二）に詳述しています。

このテキストは、胡適氏が、古くパリで発見したP三〇四七とP三四八八を、『神会和尚遺集』（上海、亜東図書館、一九三〇）として出版し、後に鈴木大拙氏とリチャード・ディマチーノ Richard DeMartino 氏がパリで発見した新たなP二〇四五の提供を受けて、改めてこれ等三本の新たな校定を、「新校定的敦煌写本神会和尚遺著兩種」（台北、『中央研究院歴史語言研究所集刊』二九号、一九五八）中に発表されたものです。この両者は、胡適氏の歿後、『胡適校 敦煌唐写本 神会和尚遺集』（台北、胡適記念館、一九六八）として出版されました。

しかし、胡適氏校定のペリオの三本は、いずれも破損部分があり、より完全なテキストの出現が待たれていました。その期待に応えたのが、かつて敦煌に在住の任子宜氏が所蔵し、後に敦煌県博物館に寄贈された、敦煌県博物館蔵敦煌遺書〇七七 敦博本と略称の出現です。もともと、これも完本ではなく、『定是非論』の首部に、五丁六十行の欠文のあることが惜しまれます。そして近年に至り、楊曾文氏による校定

が、『神會和尚禪話録』(中國佛教典籍選刊、北京、中華書局、一九九六)に収載され、その影印が、段文傑氏主編の『甘肅藏敦煌文獻』巻六(蘭州、甘肅人民出版社、一九九九)に収録されました。日本でも、柳田・椎名宏雄両氏編の『禅学典籍叢刊』別巻(京都、堀川書店、二〇〇一)に、中国版からの転写によつてその影印が収録され、見ることが可能になりました。

(三) 浄衆・保唐宗灯史

神會が達摩正系の証として採り入れた伝衣説を巧みに利用して、達摩から慧能の処に至つた伝衣を、則天武后が一旦慧能から召し上げ、それを弘忍下で資州から来た智詵に授け、そこから処寂を経て、四川省成都の浄衆寺の無相・金和尚のこと、更に保唐寺の無住へと次第したとする伝灯系譜を主張したのが、浄衆・保唐宗と呼ばれる一派であり、この派で成立した灯史が、『歴代法宝記』(七七四)です。この書は、かなりの長文で、しかも後半は無住の禅法を問答体で示しており、無住の示寂を、大曆九年(七七四)六月三日と明記するところから、無住の示寂後間もなく、無住の弟子が編集したものとされています。

ところで、自派の達摩正系を主張することが、禅宗灯史の主目的ですが、当時の中国仏教の諸宗にみる如く、更に遡つ

て、釈尊に直結するインドの相承、すなわち西天祖統説に対する関心が、時代と共に明確になっていったことが注目されます。今、禅宗灯史についてみると、北宗灯史の『伝法宝記』では、『達摩多羅禅經』、『禅經』と略称の慧遠序にある、阿難・末田地・舍那婆斯の三人の祖師名を挙げるのみですが、南宗燈史の『定是非論』では、同じ『禅經』を用いながら、慧遠序に代えて、本文序の大迦葉から達摩多羅に至る西天八祖説を立て、しかも第八代の達摩多羅を、禅宗初祖の菩提達摩にすり替え、大迦葉から西天八祖の菩提達摩に至り、更に達摩から慧能に至る東土六代を加えた、西天東土十三代説・達摩の重複を去けるを主張したのです。しかし、西天が八祖では、いかにも少なすぎると考えたのか、浄衆・保唐宗灯史の『歴代法宝記』になると、かつて天台智顛が『摩訶止観』に用いた『付法藏因縁伝』の、摩訶迦葉から師子比丘に至る二十四祖説・嚴密には第三末田地を傍系とする二十三祖説に、『禅經』本文序の八祖の内、両者に重複する摩訶迦葉・阿難・末田地の三祖を除く五祖を加上した、西天二十九祖説を主張したのです。

しかも興味深いことは、神會は『禅經』の第八代の達摩多羅を、さらに菩提達摩にすり替えているのに対し、『歴代法宝記』の編者は、別人である達摩多羅と菩提達摩の取り扱いに困り、やむなく両者の名前の共通項である達摩の二文字

を重ね合わせ、菩提達摩多羅なる人物を創作しており、その苦衷の程が偈ばれます。しかし西天二十九祖説も、過渡的役割を果たしたにすぎません。敦煌遺書ではありませんが、後世の禅宗灯史に決定的な影響を与えた智炬の『宝林伝』(八〇一)が成立し、新たな西天二十八祖説(新二十八祖説といっています)を主張すると、これが西天祖統説の定説となっていくことは、その後の歴史が証明するところです。

この書は、矢吹氏発見のS五九一六と、古くバリで発見されたP二二二五の対校が、大正蔵経巻五十一に収録され、またこの両者による金九経氏の校定が、『楞伽師資記』と同様に、『校刊歴代法宝記』(叢書、瀋陽、一九三五)として出版されました。その後更に目録等により、S一六一一、S一七七六、S五九一六、P三七二七の都合四本の残巻・断片の存在が知られ、更に新たに開端数行のみを欠くほぼ完全なP三七二七の存在が知られるに至り、それらのすべてを対校した本文校定と訳注に、解説を付して出版されたのが、柳田氏の『初期の禅史』(禅の語録 3、東京、筑摩書房、一九七六)であります。またこの書に関する詳細な分析が、柳田氏の『初期禅宗史書の研究』になされており、更にこの書とチベット仏教との関係が、山口瑞鳳氏の「チベット仏教と新羅の金和尚」(金知見・蔡印幻阿氏編『新羅仏教研究』東京、山喜房仏書林、一九七三)や、小島宏允氏の「チベットの禅宗と『歴代法宝

記』(『禅文化研究所紀要』六号、一九七四)等の論文に詳述されていきます。

(四) その後の禅宗灯史

伝衣説による達摩正系の主張も、『歴代法宝記』まででほぼその役割を果たし、時代は更に新たな伝法の証を求めていきます。すなわち、伝法偈の出現です。それは、師から弟子へと正法が伝授・付囑される際に、師が弟子に対して偈頌五言絶句の偈を授けて、仏法の相承を証明しようとしたものです。その最初が、敦煌本『六祖壇經』(七九〇頃)です。

周知の通り、『六祖壇經』は極めて異本の数が多く、時代の経過と共に記述内容が増広がみられることは、私の主宰する駒澤大学禅宗史研究会の共同研究の成果である『慧能研究』(東京、大修館書店、一九七八)の『六祖壇經』五本対照に明らかなことです。もともと『六祖壇經』は、六祖慧能が韶州大梵寺の講堂で、道俗のために無相戒を授け、自らの禅法を開示した説法の記録とされるもので、先の分類では当然語録類に入れるべきですが、その中に西天東土を一貫する祖統説もあり、特に達摩から慧能に至る六代の付法に際して、伝衣付法頌が授けられているのです。ここには、従来の伝衣説に、新たな伝法偈を加えたいわば過渡的情况が示されています。これが完全に伝法偈に統一され、伝法偈の授受によって、釈

尊の正法が、摩訶迦葉に始まり達摩に至る、新たな西天二十八祖に継承され、更に東土六代の祖師へと伝持されたことを主張したのが、智炬の『宝林伝』です。

『宝林伝』は、本来十巻あったことが、日本の天台僧円仁の将来目録によつて知られていましたが、この円仁将来本の所在は、今日もなお不明です。しかし第六巻のみが、一九三二年、常盤大定氏によつて京都の青蓮院で発見され、『宝林伝の研究』（東京、東方文化学院東京研究所、一九三四）にまとめられると、その翌一九三三年、今度は、中国山西省趙城県の広勝寺で発見された金刻大藏経の中に、第一巻から第五巻までと第八巻の、都合六巻のあることがわかり、先の第六巻を合わせて、『宋藏遺珍』（上海、影印宋版藏經会、一九三五）第三・四函に収録されました。日本では、柳田氏主編の『宋藏遺珍 宝林伝・伝燈玉英集』（禅学叢書 五、京都、中文出版社、一九七五）に影印があり、その本文校訂と訳注については、私共の駒澤大学禅宗史研究会が、『慧能研究』に続く共同研究として、『訳注「宝林伝」巻一―巻八 巻七・九・十は欠本（東京、駒澤大学禅宗史研究会、一九八〇 九六）を七分冊で刊行し、現在一冊本にまとめる作業を実施中で、本年三月上旬には出版の予定です。入口でご希望の方にお渡ししたのは、七分冊の内、巻一は絶版になりましたので、それを除く六分冊です。

この『宝林伝』を継承した次の灯史が、敦煌文献の『聖胃集』（八九九）です。ただこの書の著者とされる華嶽玄偉禅師の師承や伝記等は、すべて不明です。従つて系譜には記載できないのです。すなわち、S四四七八を発見された入矢義高氏 入矢氏と略称 の資料提供によつて、詳細な研究と本文校定が、柳田氏の「玄門『聖胃集』について スタイン蒐集敦煌写本第四四七八号の紹介」、『佛教史学』七巻三号、一九五八、柳田聖山集 巻一、『禅仏教の研究』（京都、法蔵館、一九九〇）に再録）によつて明らかにされました。

このS四四七八の『聖胃集』に触れる前に、先の『宝林伝』と『聖胃集』との関係について、みておきたいと思えます。まず、両者の題名です。『宝林伝』の「宝林」とは、六祖慧能が化を振つた広東省の韶州曹溪山宝林寺の寺名であり、この書は、釈尊の正法が、南宗の祖としての慧能に至つたことを強調しています。一方、『聖胃集』の「聖胃」とは、『宝林伝』巻八の達摩章に、梁の武帝の太子である昭明太子の「祭文」 仮託とみられる があり、その中に、「南天竺国聖胃大師の靈に告ぐ」とあることから、達摩の諡号を意味します。この書が、『宝林伝』よりおよそ百年後の成立であることからすると、禅界の大勢は、既に慧能を祖とする南宗の勝利に終り、改めて中国禅宗の祖としての達摩に関心が集まり、釈尊の正法が、禅宗初祖菩提達摩に継承されたことを強調した

もの、というのが柳田氏の見解ですが、私もこの見方に賛成です。しかし、『唐書』芸文志によると、『聖胄集』が五巻であることが明記されています。そうだとすると、東土六代の慧能までを含む『宝林伝』の十巻に対して、その半分の五巻しかない『聖胄集』に、達摩以降の東土の祖統部分があったとは、到底考えられません。『聖胄集』はあくまで西天の祖統のみで、東土の祖統部分は一切なかった、というのが私の見解であり、「東土なし」としましたが、この点は、それをありとする柳田氏の見解とは異なっています。

今一つ『宝林伝』との関係で重要なことは、既に柳田氏も指摘される『宝林伝』巻二の巻首にある注記です。それによると、『宝林伝』の入蔵に際して、第二、第十の二巻を欠いており、第二巻を『聖胄集』の該当部分で補填したが、なお第十巻を欠いていた、ということです。すなわち、現存する『宝林伝』巻二の本文は、まさしくそれに該当する『聖胄集』の本文そのものであったのです。またこの注記は、先にも述べた、現存しない『聖胄集』の末尾とも関連します。『宝林伝』の第十巻も現存しませんが、現存する最後の第八巻には、達摩から僧璨に至る東土の三人の祖師伝がありますから、第十巻は、慧能伝が中心であったことは、容易に推察されます。しかし、先の注記にいう第十巻の慧能伝を、『聖胄集』では補填できなかったのは、『聖胄集』に該当する部分が本来な

かったことを窺わせませぬ。先に『聖胄集』には、東土の祖統部分は一切なかった、といった根拠が、ここにもあるので

す。

ここで再び柳田氏紹介のS四四七八の『聖胄集』に戻ります。この文献は、首尾を欠いた残巻です。現存部分は、まず『宝林伝』巻一に記載する仏法東伝の伝説で有名な、明帝感夢求法の話の途中から始まり、次いで『宝林伝』にはない道仏角逐（道士と二人の仏教僧、迦葉摩騰と竺法蘭による）の話があつて、第一（巻）を終ります。続いて「第二」として、禅宗第一祖大迦葉から、第六祖弥遮迦までの六人の祖師伝があり、ここで第二（巻）が終つて、最後の紙の裏に、「次は第二は三の誤か」とあつて、以下を欠いているのです。因みに『聖胄集』の該当する部分で補填したという『宝林伝』巻二には、第二祖阿難章から、第八祖仏陀難提章までの七人の祖師伝がありますから、これが『聖胄集』の本文そのものとする、第二祖阿難章から、第六祖弥遮迦章までの五人の祖師伝は、新出のS四四七八と共通することになります。柳田氏もこの点に注目され、第四祖優婆塞多章について、両者の本文を対照して示されています。その結果、スタイン本の『聖胄集』は、『宝林伝』を補填した本来の『聖胄集』の本文を、大幅に省略した略抄本であることが証明されました。

今一つ『聖胄集』に関する大きな問題は、柳田氏が先の論

文末尾の(付記)に、入矢氏の御教示によるとして、北京本藏字二九 北三五五四V にも『聖胃集』の別本があるとされていることです。しかしそれは誤りで、実際はこれに接続するS二二四四Vを含めて、それが不空訳に仮託された『壇法儀則』と略称される偽作の密教文献の末尾にある、「付法藏品部第三十五」の異本であることが、この密教文献の完本であるP三九二三の発見によって明らかになりました。ただその中に、『聖胃集』の第一巻のみを、一部密教的に改変して引用していることも事実です。これは、禅宗文献である『聖胃集』の一部が、密教文献に依用されたという、禅と密教との交渉を示す例なのです。この新たなP三九二三の発見は、私の三十年前のバリでの実物調査の際のことであり、その時の感動は、今でも忘れることができません。この偽作の密教文献『壇法儀則』の詳細な検討は、『聖胃集』との関係を含めて、私の『敦煌禅宗文献の研究』(東京、大東出版社、一九八三)に収載してあります。

『宝林伝』と『聖胃集』で主張された新たな西天二十八祖説は、続く静・筠二禅徳による『祖堂集』(九五二) 高麗版大藏経付録、原版海印寺蔵 によって、過去七仏が加上され、更に道原の『景德伝灯録』(一〇〇四)に至って、過去七仏・西天二十八祖・東土六代の伝灯説が確固不動のものとなり、禅宗灯史の完成をみただのです。尚、『祖堂集』に関連した敦

煌遺書として、S一六三五に終南山僧慧観の撰になる『泉州千仏諸祖師頌』があります。この泉州千仏とは、『祖堂集』の編者の静・筠二禅徳の師であり、『祖堂集』の序者でもある浄修文僊のことであり、その「諸祖師頌」とは、『祖堂集』の各祖師伝の末尾に、「浄修禅師讚曰」として付されているものです。また『景德伝灯録』についても、従来オルデンブルク将来の敦煌遺書として、M八九七とM二六八六の二種の残巻があるとされてきました。しかし近年、榮新江氏により、この両者が、敦煌からではなく、実際は黒水城すなわちハラホトから出現したものとする見解が示された結果、現在では敦煌本からは除外されています。系譜に実線ではなく波線を付したのはそのためです。

結

以上、敦煌の禅宗灯史について、その成立と展開を跡づけながら、禅宗各派の主張する伝灯説の変遷の実態について、私が研究してきた成果の一端を述べさせていただきました。問題の論証は去けましたが、かなり専門的な内容になってしまい、切角おいでいただいた皆さまのご期待には、十分沿い得なかつたかと思えます。しかしながら、私の学問的関心が奈辺にあったのかを多少なりともご理解いただければ、それで最終講義の目的は十分果たされたと思えます。ご清聴誠に有

難うございました。

平成十五年二月二十八日、於中央講堂